
リリカルBLEACH

zerosystem

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルBLEACH

【Nコード】

N8226X

【作者名】

zerosystem

【あらすじ】

死神としての力を失った黒崎一護は魔法の世界で少女と出会う。この出会いは一体何を齎すのか。BLEACHとリリカルなのはシリーズのクロスオーバーです。不定期更新

エピソード1

藍染との決着がつき黒崎一護は死神の力を失った
だがこれはい一護の新たな戦いの始まりに過ぎなかった

黒崎一護は力を失い、共に戦った死神達と別れ、今は普通の高校生
活をおくっていた

ある日、一護は学校の帰りに妙な出来事が起こった

「なんだこりゃ？」

そこには、綺麗な宝石が落ちていた

一護はそれを拾おうとしたその時、

「なんなんだよ、こりゃ！？」

宝石から光が溢れ出し一護を包み込んだ

「うわあああああああ」

そして、光が消えそこには一護の姿はなかった

エピソード1（後書き）

なにか意見をお願いします

エピソード2

「うーん」

一護は目を覚ますと、

「っ！どこだここは？」

勢い良く立ち上がり辺りを見回し「ここがビルの屋上だということを理解した」

「一体なんなんだよ」

ポッケの中に手を入れたら、

「っ！？なんで代行証があるんだよ！？」

「一護よ」

「誰だ！？」

「私だ」

「まさか・・・斬月か？」

「そうだ。なぜ私がいるのかわからないが、斬月だ」

一護は絶句した。藍染との戦いで死神の力とともに失われたはずの斬月がいることに。

「なら斬月、もう一度力を貸してくれ」

「もとからそのつもりだ。いつも通りにやれば死神になれるはずだ」

「よし！斬月！！」

「アルフあの人誰だろう？」

金髪の少女は隣にいる少女に聞いてみた

「時空管理局．．．かな？」

「わからない。でも服装もおかしいし、魔導師には見えない」

たしかに魔力反応はない。だがおかしい。いきなり叫んだと思っただけから服装が変わり黒い和服みたいなものになり、背中には鍔のない大剣があった

「どうするフェイト？」

金髪の少女は杖を強く握り、

「アルフ、捕まえよう。あの人には悪いけど」

「分かった。魔力反応はないけど、なんか強そうだから気を付けて」

「じゃあ初撃で気をそらすから、捕獲用のバインドをお願い」

「了解！」

死神の姿になった一護は、

「よし。いつもと変わらないな」

「一護！近くになにかいるぞ！」

「!?!」

(ごめんなさい)

そう思いながらフェイトは黄色い魔力弾を放った
そうしたら、

「っ！？消えた？」

いきなり消えたのだ。
すると、

「アルフ！！後ろ！！」

「っ！？」

アルフは後ろを見た
すると、さっきの人が大剣を振りかぶっていた
思わず目を瞑ると、いつになっても斬撃の痛みがこない
目を開けると、

「はい、終わり」

と、言って剣を目の前で止めていた

「たくっいきなり攻撃してくるなんて怪我したらどうすんだよ」
オレンジ色の髪をした男はそう言った

フェイトはアルフの隣に着地する

「アルフ！だいじょうぶ？」

「う．．．うん」

「あなたは何者ですか。時空管理局ですか？」

「はあ？なんだよそれ」

「えっ」

フェイトとアルフは疑問に思った

「てか、お前らこそなんなんだよ。なんかコスプレみたいな格好して」

「いや、これは」

「しかもそつちの方は犬のコスプレか？」

「犬じゃない！あたしは狼だ！」

「アルフ落ち着いて！」

フェイトがアルフを落ち着かせる

「本当に時空管理局じゃないんですね」

「そうだよ、宝石を拾ったらいきなり光っていつの間にかここにいたんだよ」

「宝石？」

「おう、これだ」

「っ!？」

フェイトとアルフは絶句した。それは二人が集めている物なのだから

「あのうすみませんが、これください！」

「なんでだ？」

「集めているんです。目的はまだ言えませんが、でもとても大事な物なんです」

一護は少し考えて、

「いいぜ」

「本当ですか!？」

「ああ。この年でこんなことしているなんて、きっと誰かのためなんだろう。えらいじゃねえか」

一護はフェイトの頭を撫でた

「っ／／／／／」

フェイトの顔が赤くなった

「どうした？」

「いえ!別になんでもないです!」

「そういや自己紹介まだだったな。俺の名前は黒崎一護!死神代行だ」

「フェイトテストロッサです」

「フェイトの使い魔のアルフだ」

「よろしくな!フェイト!アルフ!」

「っ／／／／／」

二人は顔を赤くした

「そいや俺家ねえんだよな」

「なら家にくる?」

「えっいいのか?」

「うんいいよ。それに・・・／／／／／」
「うん？どつした？」

一護はもじもじしていたフェイトの顔をのぞき込んだ

「っ／／／／／」

フェイトの顔はさらに赤くなった
アルフはというと

(うーんなんかもやもやするな)

自分の気持ちが理解できないでいた

そして一護は異世界で魔法と巡り会う

エピソード2（後書き）

次回フェイトの食生活に一護が切れる
なのはとの邂逅があるかも
あくまで予定なので、わかりません

エレゾード3

ビルの屋上でフェイト達と出会った一護はフェイトの家にいた

「すげー！！子供がこんなところに住んでんのか！？」

一護はフェイトたちの住んでいるところが高いマンションで驚いていた

一護たちはエレベーターに乗っていた

「そっぴやアルフって耳とっぴば隠せるのか？」

一護はいつの間にかアルフの耳とっぴばが無いことに気づいた

「私はフェイトの使い魔だからね。これぐらいおやすい御用さ」

そんな話をしているうちに目的の階に着き、少し歩いたところでドアの前に立ち止まり鍵を開けた
中に入った。やはり高級マンションだけにガラス張りの壁には綺麗な夜景が映っていた

「へえ結構いい眺めじゃねえか。そっぴやここには二人で住んでんのか？」

一護が質問すると、二人は目を細くして顔を悲しそうに俯けた

「わ、わりい聞いちゃいけないことだったみたいだな」

「うっん、別に大丈夫だよ」

やはりフェイトとアルフは元気がなかった
そうしているうちに、アルフが質問してきた

「そっぴや、一護さあさつき死神代行って言ってたけど一体何なの？」

「言ってもたぶん信じられないかもしれないぞ。少なくともお前らが想像しているものとは違うと思うぞ？」

そして一護は自分の世界について話した

死神のこと、ソウルソサエティについて、ホロウについて、斬魄刀について、自分についてを話した。ただしグロいものはぐらかして

「へえあんたの世界って面白そうだね！」

「アルフ！そういう問題じゃないでしょ！」

「まあ俺は犬の耳やしっぱが生えてるお前の方が面白いけどな」

「だから、私は狼だつてば！！！」

「はいはい」

一護は適当に答えた

「次はフェイトたちの正体を教えてくんねえか」

「はい。私は『魔導師』です」

「『魔導師』？」

「はい。体の中のリンカーコアを用いて魔法を使う人たちを『魔導師』っていいます」

「へえ世界にはいろんなのが居るんだな」

一護はアルフに目を移した

「アルフは使い魔つつつてたけど使い魔ってなんだ？」

「使い魔っていうのは、主の魔力を媒体にして作られた魔力生命体だよ。ちなみに私の主はフェイトね」

「へえてことは、フェイトは凄い魔導師なんだな」

「そ、そんなことないよ！」

フェイトは頬を赤くしていた

アルフはしっぽを振っている。フェイトが褒められたことがうれしいみたいだ

グウ

一護とフェイトは腹を鳴らした本人の方をむいた。鳴らした本人は顔を赤くしていた

「フェイト、そろそろ夕食にしない？」

「うんそうだね」

フェイトとアルフが準備を終えた

「それじゃあ食べようかフェイト？」

「うん」

フェイトとアルフが食べようとしたその時、

「ちょっと待て、フェイトこれはなんだ？」

「えっなにっつて夕食だけど？」

置いてあるのは、主にインスタント食品と冷凍食品だ

「なめてんのか!!!」

一護はテーブルを倒すような勢いで立ち上がった

「「えっ」

「育ち盛りの子供がこんなんばっか食っていいと思ってるのか!!!」
「え、えっとすみません」

フェイトは一護の勢いに負け小さくなった

「それからアルフ!!お前はなにを食おうとしているんだ!!!」

「えっなにっつてドッグフードだけど？」

「やっぱ犬じゃねえか!!!」

「違う!私は狼だ!!!」

「ドッグフード食おうとしている奴に説得力もねえよ!」

一護は叫びすぎて息切れしている

アルフが恐る恐る聞いてみた

「あゝあ一護大丈夫か？」

「しゃーねえ俺が飯作るか」

一護は台所に向かい、冷蔵庫を開けた

「っ!?!?」

「どうしたんだい一護?」

「中身空じゃねえか—————!!」

結局夕食はインスタント食品と冷凍食品で終わらせた

「じゃあねえなー明日からは俺が材料買ってきて飯作ってやるか」

「何から何まですまないねえ一護」

「気にすんなって、泊めてもらうからにはこれぐらいはしねえとな」

「ありがとう一護」

フェイトが礼を言った

「礼なんかいらないうって」

「素直じゃないなあ(にやにや)」

「ぶっ飛ばすぞてめえ」

こつして一護の一日が終わった

エピソード3 (後書き)

次はエピソード1に出てこなかったBLEACHのキャラが登場！？
意見よろー

エピソード4

一護がフェイトたちと出会う1週間・・・

私の名前は高町なのは。私立聖祥大付属小学校3年生

私はあることがきっかけで魔法少女になり、フェレットのユーノ君と共にジュエルシードを集めている

そんな私の前で不思議なことが起こった

家の玄関の前が突然光り、消えたと思ったらそこには黒い和服のようなものをし、腰には刀、黒いショートカットの髪をした女の人が倒れていた

「ユーノ君、あの人誰なんだろう?」

「わからない。でも倒れているから、なのはの家にに入れてあげたらいいんじゃないかな?」

「うん」

ここはどこだ?

目覚めて見たものは、どこかの部屋だった

「よかった。目が覚めたんですね」

「ここは?」

「私の部屋です。あなたが倒れていたの、ここに運びました。」

「そうか、かたじけない」

「あ、私は高町なのはです」

「私は、」

朽木ルキアだ

そのあと、なのははルキアからどうして倒れていたのを聞いた

「うむ、任務の途中でいきなり光に包まれ、そしたらなぜかここで倒れていたわけだ」

「そうですね．．．」

「そもそもここはどこなんだ？」

「ここは海鳴市です」

「海鳴市？」

ルキアは首をかしげた。記憶には海鳴市というものが存在しないものなのだから
ルキアは聞いた

「なのは殿、空座町という町を知っているか？」

「空座町？いえ、知りませんが。ユーノ君なにか知ってる」

「いや、僕の記憶に空座町はない」

「そうか」

（ユーノ君、もしかして．．．）

（うん）

「すみません、あなたはおそらく次元漂流者かもしれません」

「次元漂流者？」

ユーノの言葉にルキアはまた首をかしげた

「つまり、あなたは次元規模の迷子ということですよ」

ルキアは絶句した。フェレットの言葉が正しければ、自分は異世界に来たということになるのだから

「元の世界には戻れぬのか？」

「すみません。僕の方ではあなたを元の世界に戻せません」

「いや．．．気にするな。ここにいれば、元の世界に戻る手掛かりを見つけられるかもしれぬからな」

「そういえば、ルキアさんの世界ってどんなものなんですか？」

「そうだな。」

ルキアは話した。死神のこと、虚のこと、斬魄刀のこと、そして自分のせいで巻き込んでしまった者のことを
なのはとユーノは啞然としていた。想像していたものとは違っても死神がここにいるのだから

しばらくして

「そういえば、なのは殿とユーノ殿は一体何者なのだ？」

ルキアが質問をした

「はい．．．」

ユーノは説明した。なのはは魔導師で魔法を使い、この世界に散らばったジュエルシードの回収を手伝っていること、そしてその原因が自分にあることを

「そんな！ユーノ君のせいじゃないよ！ただ私が手伝いたいだけで」

「そうだぞユーノ殿。それにそんなに自分を責めることはない」

「ありがとうなのは、ルキアさん」

そう言ってこの話は終わり、

「ルキアさんはこれからどうするの？」

「うむ、私としてはなのは殿の手伝いをしようと思う」

「えっ、いいんですか？」

「うむ、こんな子供がこんなことをして黙って見過ごす訳にはいかぬ」

なのはとユーノは念話で話し合った結果、

「よろしくお願いします。ルキアさん」

「ああ、よろしく頼む」

これにより、ルキアはなのはたちに協力することになった

これが思わぬ出会いをもたらすことは知らずに

エピソード4（後書き）

これに何か意見があればよろしくお願いします

次回はフェイトとなのはがついに邂逅！！

一護とルキアはどうなるのか！？

エピソード5

一護とフェイトたちが出会った日から、翌朝
フェイトたちのマンション

「フェイト、やっぱり一護は連れていかないのかい？」

フェイトとアルフは朝食を作っている。当然材料は買ってきているのでインスタントなのだが・・・

「うん、無関係の一護を巻き込むわけにはいかないから」

「でも、一護強そうだよ。人手は多いほうが・・・」

そう言いながらアルフはソファーを見た。そこにはイビキをかきながら寝ていた一護がいた
フェイトもソファーを見て、

「ダメだよアルフ」

「う・・・」

アルフは諦めたような表情を浮かべた

そして、フェイトはソファーで寝ている一護を起こした

「一護、朝だよ」

「うん」

一護はなんかうなされていた。悪夢でも見ているのだろうか
すると、いきなり目覚め、

「はっ！マタタビ!？」

顔を青くし、汗をかきながら叫び、息切れをしながら一護は目覚めた
フェイトとアルフは、一体どんな夢を見ていたんだろう?と思った
そして、フェイトが

「おはよう、一護」

朝の挨拶をした

・
・
・
・
・

「探し物を探しに行く?」

朝食を食べながらフェイトは話を切り出した

「うん」

「探し物って・・・あの、ジュエルシードとかいう玉か?」

「そう」

「そいつは、願いとか叶えたりするの?」

「「ブーッ」」

二人は牛乳を盛大に吹いた

「うわっ汚ねっ！いきなり何しやがる!？」

牛乳が一護の制服に飛び散る

「ゲホツゲホツ、なんであんたがそれを!？」

むせながらアルフは聞いた

「いやまさか当たるなんて思わなかったから」

一護は自分の世界にも同じような物があることを思い出した

「んで、お前らはそれを黙って探そうとしていたのか？」

「はい．．．」

「一護！ジュエルシードはとても危険なものなんだ！この子はあんなを巻き込みたくなかったから」

アルフは必死にフェイトを庇おうとする

一護は疑問に思った。なぜ彼女の母親はこの子にそんな危険な物を集めさせているのか。

そう思い、一護は決意した

「分かった。フェイト、俺もジュエルシード探しに協力する」

「え．．．でも、ジュエルシードは!」

「危険な物ついていいてんだらう？なら尚更協力しないわけにはいかなえ」

一護は真剣な表情でフェイトを見た

「でも．．．」

「もういいじゃないかいフェイト。本人が手伝いたいって言うんだから。それに一護は強いからきつと心強いよ」

アルフの言葉にフェイトは黙ってしまふ

「……………一護」

小さくつぶやいた

「んっ？」

フェイトは真剣な表情で一護を見つめた。一護もフェイトを見つめた

「一人で無茶しないって約束して」

その言葉を聞いた一護はやさしく微笑みフェイトの頭を撫でた

「あ、う／＼／」

「それは俺のセリフだな」

「えっ？」

「お前みたいなのは一人でなんでも背負い込んで無茶しそうだからな」

一護は意地悪そうな笑みを浮かべ言った

「だから約束しろ。お前も無茶しないって」

「う、うん……分かった。これからよろしくね一護」

「おう!!」

朝食を食べ終えた一護たちは、マンションの外に出た

ここでは二手に別れ、フェイトはジュエルシードの封印、アルフと一護はジュエルシードの搜索。といっても一護は魔法が使えないので目で探すしかないのである。それに一護はご飯の材料も買わなく

ちやならないのである

「じゃあまた後でねー護」

「じゃーねー」

「ああ。またな」

二手に別れた

海鳴市

ルキアとなのはは、なのはの友達のすずかの屋敷に遊びにきていたその途中になのはとユーノがジュエルシードの気配を察知した

（ユーノ君！）

なのはがユーノに念話を送る

（うん。近くにジュエルシードの気配があるね）

そして、ユーノはなのはの肩から降り、森の中へ走っていったこれは彼女たち巻き込まないためのことだろう

「ごめんアリスちゃん、すずかちゃん。ユーノ君がどこかに行っちゃったから探しに行くね」

なのはは席を立つ

「ユーノが？なら私たちも探すわよ？」

そう言ったのは、なのはの友達で金髪の髪をしたアリサ・バニングス

「ううん。いいよ。どうせすぐ見つかると思うから」

なのはの態度を見てルキアは思った

もしかしたらジュエルシードの気配を感知したのではないかと

「なら私も行こう。なのは殿が森で迷子になる可能性もあるからな」

そう言っつてルキアも立ち上がった

なのはとユーノとルキアは森の中を走っていた

なのははバリアジャケットを身に付け、手にはデバイス『レイジン
グハート』が握られている

「なのは！本当にこの辺かい？」

「そのハズなんだけど・・・」

突如後ろから大きな足音が聞こえた

「な、なんだ！？」

ルキアが辺りを見回して、見つけたものに驚愕した

「なのは殿、ユーノ殿あ、アレはなんだ？」

ルキアが指を指した方向にいたものは

『っ！！？』

「にゃー！ー！ー！ー」

とてつもなくでかい猫だった

「えっと、これは・・・」

「た、たぶんこの猫が『大きくなりたい』と願ったんだろうね」

なのはとユーノは苦笑いしていた

「さすがに大きすぎではないか？下手したら虚よりでかいかもしれぬぞ」

そう。この猫はそこまで大きいのだ

「と、とにかくあれじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域魔法』というものを使い、辺りの空間と時間軸をずらした

「そ、そうだね。このままだとすずかちゃんが困っちゃうだろうし」

そう言ってなのははレイジングハートを構える

すると、直後に猫に向かって黄色い魔力弾が放たれた

「にゃーーーーー!」

猫は悲鳴を上げながらよろめいた

「な、なに!？」

魔力弾が発射された方向を見た

そこには、金色の髪をツインテールにし、黒い服に身を包んだフエイトがいた

エピソード5（後書き）

今回はどうですか？意見などよろしくお願いします

次回、ルキアが力発揮！？

エピソード6

(私と同じ魔導師・・・)

白いバリアジャケットを着た少女を見ながら思った

(でも・・・母さんのために・・・ジュエルシールドは譲れない)

そして、フェイトは彼女の木の上に降りた

「あれは・・・まさか僕と同じ世界の魔導師!？」

「じゃあ、あやつの狙いもジュエルシールドか!？」

そうやってルキアは斬魄刀を抜き、木の上の降り立ったフェイトを見据えた

なのはとユーノもフェイトを見ていた

そしてフェイトの持つバルディッシュが変形し、鎌のような形になった

「申し訳ないけど、いただきます」

そう言い、フェイトはバルディッシュを構え、なのはに襲いかかる

「なのは!」

ユーノが叫ぶ

バルディッシュの刃がなのはに迫る
だが、バルディッシュはなのはに届かず一本の刀に止められた

「!?!」

フェイトは攻撃を止められたことに驚いた

「ルキアさん!」

白い魔導師は少女の名を呼ぶ。フェイトはその名を聞き驚いた

(ルキア!?この子今ルキアって言った!?)

その名は一護の話を聞いた時に出てきた名前だ。一護が死神になる
きっかけを与えた人物

フェイトは動揺しながら刀を持つルキアを見た

「なのは殿には指一本触れさせぬ!」

そう言つてルキアは刀を払い、フェイトは後退した
そしてルキアは構え、自分の斬魄刀の名前を叫んだ

「舞え『袖白雪』 次の舞白漣!」

そしてフェイトに凍気の波が押し寄せてきた

(や、やばい!)

フェイトは目をつむってしまった

すると、突如前から強い衝撃と爆風が吹き荒れた

フェイトは、宙に飛ばされたが、空中でなんとか姿勢を立て直した
「な!?!」

目を開けたらそこには上を見上げ、何かを見て驚いていたルキアがいた

「なぜ、貴様がここにいる!?!一護!?!」

私も上を見上げた

そこには大剣を振り落としたあとの一護がいた

なのはたちとフェイトが対峙していた頃一護は、食材を買い終わり、フェイトのマンションにいた

「あいつらまだ帰ってこねえのか?」

フェイトたちのいないリビングで一護がぼやいた

「一護よ」

「ん?どうかしたのか斬月」

「フェイトのいるところに霊圧を感知した」
「なっ!」

一護は驚いた。霊圧があるということは自分の他にこの世界に来た

死神か、虚がいるのだから

「誰の霊圧だ？」

「それはわからん。だが早く向かわなければ取り返しのつかないことになる」

「分かった！」

そして一護は死神化し、外に出て霊圧を探り、

「！向こうにかすかに霊圧を感じる」

「急げ一護！」

「ああ」

そして一護は向かった

瞬歩で移動しながら、距離が近くなるにつれて霊圧が大きくなる。そして一護はその霊圧に驚いた

「なっこの霊圧は！」

それはかつて共に戦った友であり、あの時別れた人物の霊圧だったからだ

「まさか」

そしてそのポイントに到着し、確信した

「ルキア！」

そこには、かつて自分に死神の力を分け与えた人物、朽木ルキアがいた

そしてルキアは目の前の少女に向かって技を出した

「っ！やばい！」

そう言い、一護は背中に背負った斬月を取り、振りかぶった
そして、

「間に合え！月牙、天衝！！」

そして、その一撃はフェイトの前で、ルキアの技を防いだ
ルキアがこちらを見上げ、

「なぜ貴様がここにいる！？一護！！」

フェイトもこちらを見上げた

一護はため息をしながら、フェイトの横に降り立った

「それはこっちのセリフだ。なんでお前まで・・・」

「それよりなぜ貴様死神の姿をしている！？」

「そんなもん俺だって知りてえよ」

一護とルキアはいきなり口喧嘩を始め、そこにアルフが狼の姿でや
ってきた

「フェイトー！」

「アルフ！」

「大丈夫かい！？フェイト」

「うん」

二人は地上にいる少女を見た

「他の魔導師かい？」

「うん」

フェイトは一瞬躊躇ったが、言った

「一護の仲間も居る」

「一護の！？それは本当かい！？」

「うん」

フェイトは頷いた

「よし！あたしがあの子を相手するから、その際にフェイトはジュエルシールドを回収して！」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？心配いらないよ」

アルフはフェイトを安心させるように言った

「一護の仲間は傷つけたりしないから」

「……うん、お願いね」

そう言いながらフェイトは微笑み巨大猫の方へ向かった

「マズイ！ジュエルシールドを封印するつもりだ！止めないと！」

ユーノが叫んだ

「そうはさせないよ！！」

空からアルフが迫る

「ユーノ君!!」

「大丈夫だよ、なのは!」

そう言い、アルフの攻撃を魔法の障壁で防いだ

「ちっ!」

アルフは一旦離れた

「なのは! ジュエルシードを!」

「う・・・うん!」

なのはは走り出した

「させないって言ったろ!」

アルフがなのはの背後から攻める

「なのは!」

ユーノが叫び、なのはは目を閉じた

その時、

「はぁああああ!」

さっきまで一護と口喧嘩をしていたルキアが斬魄刀で防いだ

「ルキアさん!!」

「ルキア!？」

(フェイトの言ったとおりこいつは一護の仲間!?)

アルフがそう考えていたその時、ルキアが刀を振り払ってアルフを後退させ、刀を地に刺し両手を前に出した

「破道の七十三、双蓮蒼火墜！」

「くっ！」

アルフは障壁ごと後ろに吹っ飛ばされた
木にぶつかりそうになったが、アルフは木にぶつからずに済んだ
なぜかというと、

「ふう〜ギリギリだったぜ」

一護がアルフを受け止めたのである

一護は咄嗟に瞬歩で割り込んだのである

アルフは、顔を真っ赤にし、

「あ、ありがとう」

お礼を言った

すると

「アルフ!一護！」

フェイトが戻ってきた

「フェイト!!」

「ジュエルシードは回収したよ」

そう言っただけで彼女たちは立ち去っていった

「しまった！ジュエルシードが！！」

ユーノは猫のもとに走り出し、なのはとルキアも後を追う
巨大猫のいた場所に着き、そこには元のサイズに戻っていた猫が倒
れて眠っていた

「やられた・・・」

ユーノは悔しそうだった

だが、一人別のことを考えていた

（一護、お前は一体・・・）

ルキアは一護のことを考えていた

エピソード6（後書き）

どうですか？なにかありませんか？
意見よろしくね

エピソード7

一護たちは近くの公園にいた

そこでは一護たちは険しい顔をしていた
なにせいるはずのない仲間、ルキアと出会い敵になったのだから

「一護」

「ん？」

一護はフェイトを見た

「いいんだよ。仲間のところへ行っても」

フェイトは寂しげな表情を浮かべながら笑っていた

「私たちは大丈夫だから。短い間だったけど楽しかったよ」

フェイトは今にでも泣きそうだった

「行こうアルフ」

そして席を立ち一護に背中を向けた

「フェ、フェイト……」

アルフは戸惑いながらフェイトの後ろを歩く

「ちょっと待てよ」

一護はフェイトたちを呼び止めた

「ルキアがいるからそっちに行かなきゃならない？」

一護の顔は真剣だった

「そんなもん関係ねえ」

「えっ」

「俺はフェイトたちに手伝うって言った。なら最後までやらせてもらっぜ」

「でも」

そして一護はフェイトの頭の上に手を置いた

「えっ／＼／」

「それにお前らに飯を作るって約束したからな」

「あの人は…」

「ルキアなら心配いらねえよ」

そう言っで一護は立ち上がった

「さあ帰ろっぜ」

フェイトの頭を撫でた

そして一護は歩きだした

その後ろ姿を見ていたフェイトは、

（ありがとう一護）

笑顔を浮かべながら心のなかでお礼を言った

そして一護は台所で料理を作ろうとしていた

「一護あんた料理出来るのかい？」

「まあ妹の手伝いはしていたからな」

「そうかい、じゃあよろしく」

そう言っただけでアルフは台所を離れた

そう言った一護は手馴れた手つきで食材を切っていた

そして具材となにかを鍋にいれ煮た

そして完成した料理は、

「さあ完成だ」

カレーだった

フェイトとアルフは前に置かれたカレーを食べた

感想は結構美味しかった

フェイトは味よりも人に料理を作ってもらったことが嬉しかった

アルフは普通に美味しそうに食べていた

「ごちそうさま一護、とても美味しかったよ」

「うん、初めてだよ！こんなものを食べたのは！」

フェイトとアルフは大絶賛だった

「ドッグフードよりマシだろ？」

「うん」

アルフにとってそこは微妙のようだ
腕を組んで悩んだ

「ドッグフードも…」

「アルフは明日の朝食は無しな！」

「ええ〜!?!」

アルフはシヨックを受けた

夕食を終え、食器を片付け、一護とアルフは席に座っていた

一護はアルフを見て、あの犬の顔をした大男のことを思い出していた
あの人は威圧感がすごかったが、アルフはあの人とは違って可愛かった

もちろん恋愛には関係ないが…

そしてアルフが聞いてきた

「一護」

「ん？なんだ」

「いいのかい？仲間のこと…」

「…心配じゃないって言ったら嘘になる」

「だったら…」

「でも俺はフェイトに協力すると約束した。それに俺がいなくなったらお前らまた栄養が偏ったもん食いそうだしな」

もちろん一護はルキアのことは心配だ
だが仲間のことを優先してフェイトたちのことを見捨てることな
んてできない

「優しいんだね一護は」

「まあ同じくらいの妹がいるからな。そいつらと同じように放つと
けないんだよ」

「でも、探しはするんだろ」

「まあな」

「素直じゃないな」

「飯抜きにするぞ……」

「！それだけは……」

一護の言葉にアルフは謝った

一護は眠そうに立ち上がり、ソファーに寝っ転がり目をつむった

そして意識が遠のいていく中で、体になにかが掛けられ声が聞こえた

「おやすみ、一護」

それを聞いた一護は眠りについた

エピソード7（後書き）

今回は短くしました

次回から温泉
意見よろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8226x/>

リリカルBLEACH

2011年10月29日02時19分発行